

北越雪譜二編卷之四

目錄



○異獸

弘智法印

○火浣布

土中の舟

○兩頭の蛇

石打明神

峨眉山下標準

○三四月の雪

○浮島
○美人
○苗場山
○鶴恩小報ぬ

通計十三條



北越雪譜二編卷之四

越後 鈴木牧之編選

○異獸

江戸

京山人百樹增修

乞ふまゐるうり竹助とろえと投とけよびうきとげあくひうり是あて
竹助心をやまとすもあえりとどもくとくとくとくとくとくとくとくとく
我ハやうの内より十日町へやうのうりあそはこをうづと又せきめし
をともとぞういそぎのつみあそはゆとぞもうちもきだす荷物をせま
んとせーふるすの荷物をとくとくかくとくとくとくとくとくとくとく
竹助とへまきやーの礼ふまきをなもくかくとくとくとくとくとくとく
かのりのひづふりのあじがどくと竹助ハ嶺岨の道もこもとたぬかゆく
むと一里半あまうの山をもとをみて池谷村ちくふいすー時荷物
をばもうー山へかけのぐるそとを事風の如くとと竹助が十日町の
問屋ふくらう語りーと今ふりひつて是今より四五年以
前の事うりちう頃山をまどりのをくくハ此異獸を見よすもの
もありとぞ○前ふくら池谷村の者の話小我ま十四五の時村うちの娘

魚沼郡掘内より十日町へ越る所七里あまり村へあまと山中の間道
うりまきてある年の夏のとトドメ十日町のちくと問屋うりの内問屋白縮
うふやどりとぎあざーとひとけめあそひの日の畠をづ頃竹助とのふ
剛夫をえくと荷物をむせとひとけめあそひのからうの石ふ腰かけ
くるころ日よハセツホちくと竹助をぞとくとくとくとくとくとくと
焼飯をえひゆるふ谷間の根籠をかゝとくとくとくとくとくとくとくと
を見まゞ猿ふ似て猿ゆもあくと頭の毛長く脊ふたとくとくとくとくと
文ハ常並の人よりなまく顔ハ猿ふ似て赤くと眼大くと光りあり竹
助ハ心剛ある者ゆゑ用心ふきとす山刀を提とくと斬んと身をまへけるふ
此よりはさる氣色もあく竹助が石の上ふをきとす焼飯小指ーとくとく

小機の上手ありて問屋より名をさしてちとをあつへらひいもご
雪のまことのそりする匂のゆふ機を織りゆう小匂の外小立すを
しまど猿のやうふく顔赤くすかららの毛長くとまく入よりへ大
きうがそーのときけり此時家内の者いとみ山をせぎふいでむすり獨り
あまびことまく小悞まをもどろき逃んとしまど機ばかりとば腰こしふまたに
つけする物ありて心ふすせどぞくちるうちのりの立まりりあて
かまどのゆふ立臺たて下した小飯櫃くわび小指ゆびを欲きまゐり娘此異獸の
事をうゆく聞きゆゑ飯を握いざなりてニシニツあえげまばうととけふ
持まうけりちのち家の人うき時ときハをりく來りく飯をもふゆゑ
後あと小駒駒をそろそろすすまきのをそそりそそり○先此娘 尊用そんようありて
急いそのちふちふをありかけかけ小折おひれ月水げつすい小立こだて御機屋ごきや小入こいり事
あづあづ 御機屋の事初 手てを停とどめ居ゐ日限ひげん小後おご娘むすめ双親よのおや

此事を患ひ歎きけり月つきより三日さんじつはあつる日の夕ゆふと家内のりの農業のうぎょうよりかへりざるをあつてふやがりの夕ゆふがくきてまどり娘むすめ人ひと
のひふごとく月つきのうまひをかづつ粟飯あわごはんをゆきすくあくあくくまくま
まとのごとくちぐ小立こだてをあらうりのむかまむかまくくやがてなちまま
けりまえ娘むすめハ此夜このよより月つきをもとまもとましゆふ不思議ふしきぎとかひのゆゆ
身みをまつて御機ごきを織果おりちの父問屋めぐらや持去もとどり往着ゆきつけとあひへ頃娘むすめ時ときあづあづ俄あづ小紅潮こうしやふうりのえまへ我われが歎かなへと聞きてかのと
我われを助たすくと聞きく人ひとも不思議ふしきぎのむすひをうけりと語かた
そのうへ山中さんちゆうかくなまきふ見みるりのもあり一人ひとりゐて連つづく時とき
形かたちを見せあらわせとぞ又高田たかだの藩士はんし材用ざいようゆふ樵夫きょうふをあまあま黒姫くろひめ山さん入り
小屋こやを作つくり山さん小日こひをうつせうつせ時とき猿さる小似こね猿さるもあづあづる物もの夜よ中なか
小屋こや入りいり焼やき火ひ小ああままたけたけ六尺ろくしゃくをうり赤髮あかひ裸身らきみ通身つうみん灰はい

山中異獸の圖



卷之十

文溪堂藏



卷之六

廿六

文溪堂藏

秋月羣牧之草

色ふくもの脱下似腰より下小枯草をまく此物よく人のいふ
ことあるがのちの人によく人ふ馳と高田の人のことと按る小和漢三
戈圖會寓類の部小飛驒美濃あるハ西國の深山ふも如件異獸ある事
をあるせりまたばりづとの深山ふもあるものうべー

○火浣布

宝曆年中平賀鳩渓源内火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の
古書を引本朝未曾有の奇工小誇より没してのち其術つらはず好事
家の憾事ともある小我國嘗火浣布を作の石を産をその在る所も
金城山。巻機山。苗場山。八海山その外ふもありその石軟弱ししく尻を
りつても犯をべき木の軟ある石ありいろへ青く黒一寸をくびけバ
石綿を出を此石を得て試し小石中少在る石綿とりより木綿とこを
細く袖子を二三分ほどおちぎりするやうあるものあり是を纺績する小祕術

ありて火浣布を造るあり其祕術を得バ小女子も火浣布を織るべ
つまえ我驛中小稻荷屋喜右門どのへの石綿を彷彿する事ふ千思
万慮を費し竟小自そひの術を得て火浣布を織り又其頃我近
村大澤村の医師黒田玄鶴も同様火浣布を織る術を得る各々
祕しそちの術を入ふ傳へざるをす時をすと村つまふてもうド火浣
布の奇工を得ずも一奇事あり是文政四五年の間の事ありき此両
人の説をまこと小力をつくし文以上あるを織うべくも其機工容易
あらずとし平賀源内火織工五六尺ふ過むと火浣布考ふりまた玄鶴が源
内ふまきりする事ハ玄鶴ハ火浣布の外火浣紙火浣墨の二種を造
り火浣墨を以て火浣紙小物をまき烈火ふけて火とありてをも
くふとくしづて火氣よしとば紙も字もまどりとあると必ず其實用
を以て火浣布も火浣紙も火災の供あふ憑だつてのんとあまび火可

遇ハ俱ふ火となり人ありて火中よりひきだ火と俱ふ碎けく形を以
うひたる灰とあらざるのみあり觀具より用うる所のみぐわへて源内
死ノモ奇術絶テ一え小件の兩人ひゞ火浣布の機術再世ふひづか
鳴呼可惜此兩人も術をつゝもとく没おも火浣布をび世小絶
すりかの源内ハ江戸の饒地ざわち火浣布を織おり其聞え高くも
兩人ハ越後の辟境へききょう火浣布をもとめ其名ひひくも
ノ好事情家の一話はなし供す

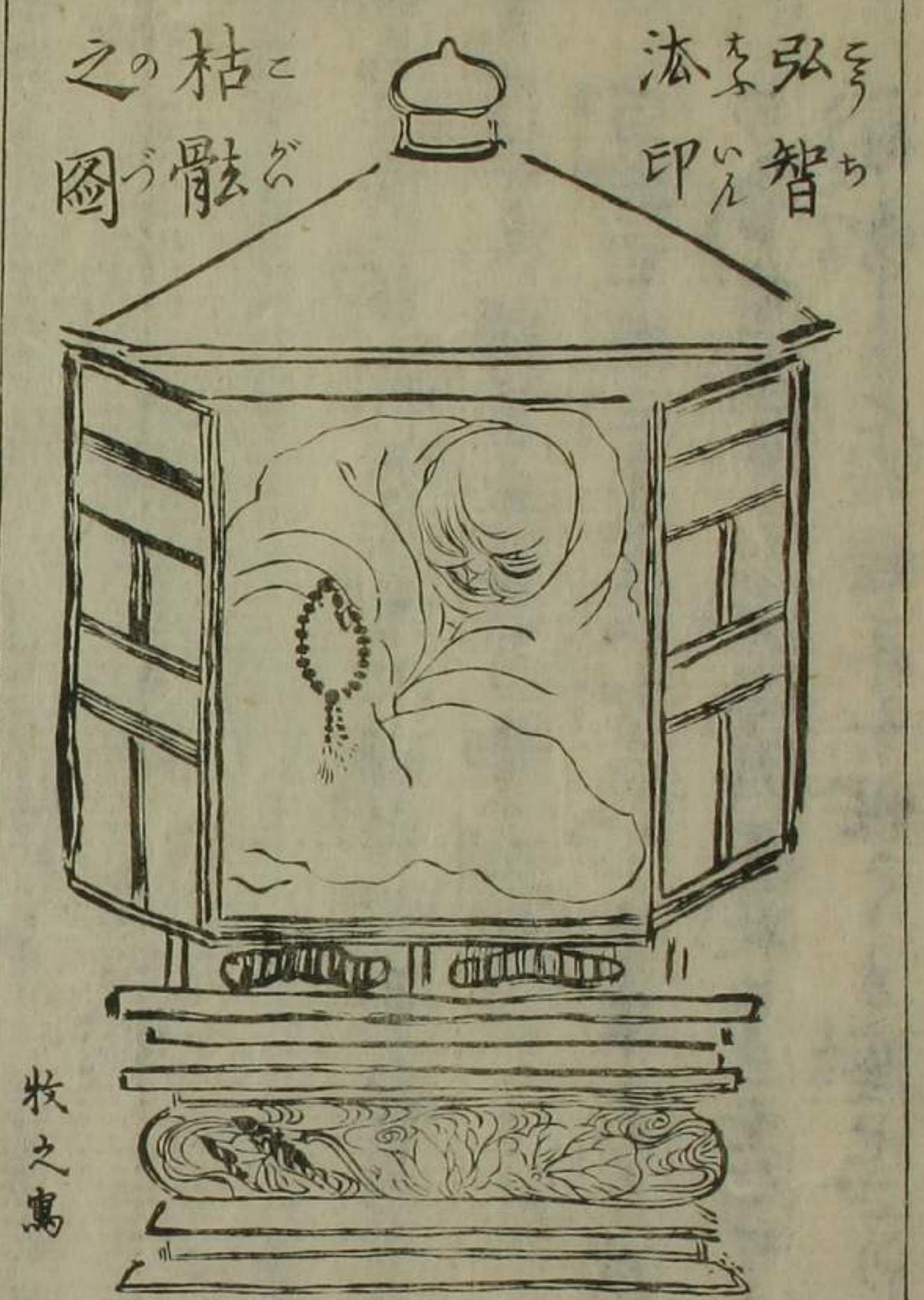
○弘智法印

弘智法印ハ兎玉氏下總國山東村の人より高野山はやまを誰ぞと入間なまを墨繪すみゑ小書こしょ松風の音
學の後生國くに小飯こべり大浦おほらの蓮花寺れんげじ小住すむ行脚けいがして越後えちご來り三
嶋郡のしま野積村のざか里言海雲山西生寺かいう山西の東ひがし岩坂いわさかとの所の錫すずをもたらす草
庵くらわんをもとびもと小貞治二年癸卯十月二日此庵くらわん小寂せり辭世さぜとく

口碑ひふつてゐる哥お小山坂やまざかの主ぬしを誰だぞと入間なまを墨繪すみゑ小書こしょ松風の音
遺言ゆげんありとく死骸しがいを不埋ふまい今天保九てんぽうをきる事四百七十七年より
りく枯骸こがい生おる如ご一星ひしやくを越後えちご廿四奇じゅうよの一小數いっこう此事こと雜書ざしょ
散見さんけんもとども圖ずをのせてあるゆきやも小圖こずをこぶひども此圖
ハ余先年まことに下越後えちごがあそびもと時とき目擊めげきした所ところより見み所ところにて面
部おもての手足てあしハ見えぞ寺法てうふとて近く觀くわん事ことをやうきひらき閉眼ひるまつ
皺しわありと眠ねりする如ご一頭巾つばひん法衣ぼうぎハもともとのままああととざるううて
是これ他國ほかくに大おほ聞きる越後えちごの一奇じ跡せきあり

百樹曰唐土とうどゆも弘智こうち似おなづする事ことあり唐の世せいの僧義存ぎしゆん没ぼつて
のち戸とを函はこ中なか小置おき毎月其徒その徒ことをひびひび丸髪まるはつの長ながすを剪き
羅常らつねとと百餘年ひゃくよを經へても廢あつせざりしづ後國ごくにのとづれとづれつつふ
因いんてことを火葬ひなましせしとぞ又宋人彭乘ひやうじやうが作墨客さく揮犀き犀さい

荆州の僧无夢も戸を不埋丸髪の長す義存ふ同トから



○土中の舟

蒲原郡五泉の在一里ぞうり下新田との村あり或年此村の者ぞも夏
あく阿加川の岸を掘れ小土中より長さ二間ぞうりの船を掘れ
一時杉田村小野佐五左門が家先かの船の木ぞく作りたる硯箱を見
一木質漢産ともぞく上古漂流の夷船ぞやあん

○白鳥

前ふりゆる如く雪譜と題ちるより他事をりハ哥ぶりの落題あれ
と雪ハまご末ひりべ「姑くむすひいどと小まよそ○天保三年辰四月
我^{ナム}住塩澤の中町小鍵屋某が家のやうに喬木あり此樹小鳥巢を
むちび雛稍く頭をひざむころ巢のうち小白き頭の鳥を見る主人怪しう
人をりと星を捕^{ムク}レ小全身ハ鳥小^{シモ}と白く觜眼足ハ赤き鳥の雛
きり人^キ奇と^ミ集り觀^ミ了主人俄小籠を作^スセ心を盡^スく養ひ

や長く鳴音も鳥小異うべど我が近隣あまび朝夕ニモと觀す
奇鳥あまびをふ人も多く江戸へ出く觀物小せんあどひいも有
主人を一そえゆきさくかく其冬雪中ふひて山の鼬狐うど餌小乞く
人家ふきてりて食をねむ事雪中の常あまび此より所為ふや簾
ハヤがきて白鳥ハ羽毛うり様の下小ありとて初編小白熊の事を載
たるゆゑ白鳥もまたこふ記し

○兩頭の蛇

文政十年亥の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端
小兩頭の蛇りてすを捕ふ長さ一尺小たゞぞとの頭二つ並びて枝をのみ
のむりうもかくらと常の蛇ふうらもあふまきをくすきに相ふりと餌も
いきもき一か二三日ままでりの逃れまくやわうりをなづく一とぞを
ぎアーテとぞ

○浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村といふありと小郡殿の池とて四方三町斗
の池ありて浮嶋十三あり晴天風うき時日出三巴十三の小嶋ちのく
離散一と池中小遊ぶが如一日入是池の正中一小あつまりて一つの嶋とある
此池小種くの奇異あまびも文多けとあるまば羽川の浮嶋ハものゆす記
く人の知る處あまび此うきあはる人きとあり

○石打明神

小千谷の内農人某の地面小社あり石打明神といひ昔より祀る處也
その縁起ハ聞りせり贅肉あむの此神をひのり小石をもつていがを
撫社の様の下の簷子の内へ投りとく小日あくぞくらやのいつ事
奇妙うりさてうげりとる小石りうる形うりとむりとく人の圓ら
とるごく圓石とくも又奇妙うぎうりとくバ社のえんの下小大小の

圓石滿まちうら○百樹曰余も小千谷こせんや小遊びおあそび一時此石を視みて話はな柄の小
一持帰もともどんとせ一小所の人のよりよ比神星ほくせい石を惜うみ玉たまをとりひつひつと
きて取とるをりとと處ところにてにて視みる小數万の石人の磨すりき
す玉たまのごとと凡神妙ふんしんめうハ肉知にくぢを以もちて測うべべど

○美人

百樹曰小千谷こせんやの因いん小この余小千谷こせんやの岩居いわゐ家いえ小旅宿おとしこせ一時天保七年八月
或日筆ひを採う小倦山水こまんさんすいの秋景しゅうけいを觀くわんむと獨步ひとりあゆりで小千谷こせんやの前
小流こりゅう川かわ小臨岡こりんが小のびり用意よめいする書かずをくも壇だんを老樹ろうじゆの下した
走はし煙えん走はしせつ眺望てらぼう引舟ひきふねハ浪なみ小遙とほりくうごとくうが如ごく下さ
舟ふねハ流なが小順じゆ走はし飛と小似おなじ行雁字ゆうがんじをくへ歸樵画きかくをひく
群木ぐんぼくハ少すくなく霜さむを染そめ紅べに連山れんざんハ僅すこ小雪ゆきを載の白しらく寒
國くにの秋景しゅうけい江戸えどの眼まなこを新あたらすすむぞ一絕いつぜきを得とべべて去さ

をを一一うきうちうきうちゆゆをを一一十六七じゅうしちの娘むすめ三人さんじんがが柴籠しばらをせせひ山
ををのびのびててふふままひひああややんんののひひかかててそそりりををままくく余よ
山水さんすい小目こめを奪だつひとひと小火こひををかかみみままととくく烟管えんぱんととよよせせすす顔ほを
見みせせ蓬髮素面ほうはつそめんみて天質てんしつの艶色えんしよく花はなととりり玉たまとと比ひてて
百結ひゃくけつの鶴衣つるい此趙璧しおうへきを羅らむ余愕然よがくぜん一一山水さんすいを棄きて此娘このむすめを視みる
一揖いっさく一一去さり樹きの下したの草くさ小坐こざ一一わわををあげあげ一一ききややるる火ひを
うつうつ一一むむそそら三人さんじんひとひと吹烟双無鹽獨ふなむしじゆくの西施せいしと語はは蒹葭蒹葭
玉樹ぎょくじゆ小こよよぶぶ如ごく皓齒こうし燭爛しゆらんととそそよよ白芙蓉はくふるもの水みずををいいぐ
微風びわい不搖ふようががとと嗟平惜あいへいせきべべかかくく美人びじんも是邊鄙そへんひ小生こじゆうとと嘗な
庸頽夫ようたいふの妻めととり巧妻こうさい常つね小拙夫こせつぶ小伴ことも眠ねり荆棘きんせきと俱とも
腐くらん事こと憐れ不堪ふかん一一若江戸わかえど朱門しゆもん小解こげき語ごの花はなを開ひら
ああいいハハ又また青樓せいりゆう小搖泉樹こようせんじゆの榮さかえをを此隣國しそうこく出羽しゆうだい小生こじゆうととてて

小野の小町が如く美人の名をもうそぞ此美人を此僻地小出
すハ天公事を解きまふ似たりと獨歎息一つ言んとす。娘めのこが
去來とくあさび柴籠しばらうをせむひうちのまく立まうけり目送く
頗越後おほえち美人多一と人の口實くわくふりふもうべかり是無他。水
ふよるやゑありきとて織物の清白きよはくより越後の白縮しらしゆくふ勝まさまく
ヨリととき此邊ハ白縮しらしゆくを産うぶすなむ所あり以て其水の至清うる
をある。江河潔清せきせいあまバ女めのこ佳粟かぐら多一と謝肇淛さいしおがいひ
理はじありとむひつ旅宿りょしゆ小帰こかへ云いの事ことより美人を視みりと岩居いわゐ
居ゐふ語ごりけとば岩居いわゐの渠くわい入いりの知しる美女うつくし先生を他國の
人と眼解めかわ取となごの火を借くわすうん可憎くわいく否まくふくもづくす
吾われたゞの火を借くわて美人うつくし人ひとふえん烟たばこをむそびむそびと戯言わざごんひとば岩居いわゐ
手てを拍たたく大おほ笑わらひ先生誤まちりうまく屠たご者の娘むすめと聞きく再び

愕然がくぜんより糞壤えんじよう妖花ようかを出だそとへかくる事ことふぞりひくうるべ
○再按ふ小野の小町ハ羽州はしゆの郡司ぐんじ小笠おがさの良實よしの女めのこうり楊貴妃ようきひハ
蜀しょく州しゆうの司戸元玉もとだにが女めのこうり和漢わかん俱とも小北国こほくの田舎娘いなかむすめ世よ美人の名を
つて北方ほくほう小佳人こかじんありとりひくも北きたハ陰位いんゐうまく女めのこ小美粟こみくらを出だ
みやわん二代目の高尾たかおハ万野州まんのふ生うぶすなと初代の薄雲はくうんハ信州しんしゆふ產うぶすなて
キこ小北廊こほくろうふ名なをうせりまつた越後えちごふ件くだんの美人を見みく。北国
うまくひうるべ

○峨眉山下橋柱

文政八年乙酉十二月剣羽郡けんとう越後推谷えいごの漁人ぎじ椎谷しいや八幡侯はちまんこうのあつ日椎谷しいやの
海上小漁さうぎして一本の流なげ漂はふを見て薪いのしふせとよとく拾あつひ取とて家いえふ
くり水みずを乾かわさんとく底そこふ主寄ぬきをすまうを椎谷しいやの好事家じごくわ通つうかうり是これを
見みた。うまく本ほんとくひ熟視じゆじふ峨眉山下がめさんげ喬たかといひ五大字刻こくりあり

しをよりのくかの國の物とよりひ漁人いざなみや薪いにしおをうてともひうけあるとぞ
きそ余よが旧友觀勵上人おもてハ推谷すいこくざさ田沢村たざわ強學きょうがくの聞えあり嘗て好事の癖
ありを以よすかの橋柱はしむしらの文字を双鈎さうく刀ホトヘル劍つるぎにて同好どうこうふらうり且橋柱はしむしら小題
考かん吟詠ぎんえいをことり是ぜも又梓あづきふして世よ小布ちんとせまつせまつて故ゆゑありくらひまざ
不果なまざうの橋柱はしむしらハ後のち小御領主ごりゆうしゆの御藏ござうとうりーとを推谷すいこくハ余よが同國どうくうまと
ども幾里へいりを隔はさんで其真物じまんものを不見ふみ今いまふ遺憾いがんとを姑傳寫よしんでんしやの圖ずを
以よそこ下しも小載のりつ。百樹ひゃくじゅ曰牧之翁ぼくしきやう此草稿しやくひょうふのをとす箇かを見みふせんせんくくちの所有
百樹ひゃくじゅ曰了阿上人りょうあじょうじん和哥わごの友相場氏あいばうしハ推谷すいこく侯こうの殿人てんじんときてて上人
の招まねき人ひとをよりのく相場氏あいばうしふ對面たいめんして件くだんの橋柱はしむしらの事を尋たずひひふ
余よ謂いへ橋柱はしむしらふあくづ標準ひょうじゅんうりと俗ぞくふ書かく輪わん席せきといふ物
ふ作りつくりと出だし其圖そのずを示あらわす余よが友ともの画人がじん千春子せんしゅんしが眞
物ものを停ていふとまく縮圖くわくずう娥眉がび山下さんげ斎さいといふ五字ごじハ相場氏

まづく心こころを深ふかめてうづきまくとぞくれりく形かたちする人の頭かしらを
左ひだりふ頑がんせせぢぢ下しもふ五字ごじを彌まつつハ是ぜトと左ひだり峨眉がび山下さんげ
橋はしうりと人ひとふををの標準ひょうじゅんうりとくろきを是ぜふく美理みり
渙然わんぜんすす今俗ふる小指こしを多おほきくそめああふををゆる所ところを記き
するを間まる事ことあり和漢わがんの俗情ぞくじょううりうり事ことありあります。さて此標
準ひょうじゅんを得とる實事じじをまづ北海ほっかいハジはじとの所ところががき所ところ
北風ほくふう烈はく磯いそへ物ものをうちよもる椎谷しいやくハたきのふととががき所ところ
ゆゑ貧民ひんみん拾あつひ取りとり薪いにしおととも事こと常つねうりうりあつる文政ぶん政八は酉酉の
十二月例じゆの如ごとく薪いにしおを拾あつひふ出だし物ものあつあつ柱しらのごとく浪なみふ漂漂流
をまよまよぶ人の頭かしらとまよまよる物もの甚ひん兇惡きのううりうり貧民ひんみん等など恨うらままなな
まづりのうげうげうりうり見居みゐうりうりふ此この竟きのうふ磯いそふうもあげあげままを
見みく人ひとく立たつしたしたふ文字もじハああひひとと讀者よううく是ぜハ何なんりりの

うんとまみぐ評一居ううをうりもこふ近き西禪院の童僧
通りかう唐詩選ふくわざそく峨眉山の文字を讀こまへ唐土の
物ううときて貧民拾ひて持つりまとふ唐土の物ときて新あ
せざりしふ此事閻傳しも竟ふ主君の藏とうりと語るまき
○按ふ峨眉山ハ唐土の北ふ在す峻岳も富士ゆゑづき高山
あり絶頂の峯双立二字をうそゆゑ峨眉山といふうり此山の
標準日本の北海(うがときてうたる)其水路を詳究せんとて「唐土
歷代州郡沿革地圖」小挿て清國の道程圖中を檢する小峨眉山
ハ清朝の都を距こと日本道四百里許の北ふ在り此山ふ遠くぞ
一條の大河東ふ流峨眉山の麓の河々皆此大河ふ入る此大河
瀘州を流る三峡のふりを過ぎ江漢ふ至り荊州ふ入り洞庭湖
赤壁。潯陽江。楊子江の四大江ふ通じて江南を流酒りて東海

小入る是水路日本道五百里をうりうりきて件の標準洪水あて
水小へりけん。洞庭。赤壁。潯陽。楊子の海の如き四大江を蕩漾周
流。朽沈を潜くよる水路五百餘里を流る。東海ふ入り巨濤小
千倒。一風波ふ万顛をまども断折碎粉せむ。直身挺然とく。我
国の洋中小漂ひ北海の地方小近より。椎谷の貧民ふ拾ひて始く
水を辞。既ふ一燼の薪とうぎを幸ふ字を識者ふ遇ひて死灰を
椎谷侯の愛を奉じ。身を宝庫小安ん。万古不朽の洪福を
保つ。史奇妙不思議の天幸うまと。實小稀世の珍物あり
緒圖左のど

娥眉山下喬

登苗場山之圖

ドサ

秋山

宵間清露濕衣巾

寒際早蒸四全卦

呼吸極通帝座

徘徊却愧問天人

吐息毛雲似

かく舞草の秋

秋

信州千曲川

秋村



按むる小蛾城同韻五何反うまび相通トく往く書見を橋を喬マツ小
作了頗る異体うり依て明人黄元立が字考正誤清人顧炎武が
亭林遺書中小在了金石文字記あひ碑文摘奇タケモサキ藤花亭十種
あひハ楊霖竹菴マツアシ古今疑中の字脉の部トス通卷一遍搜
索をとども喬の字う蛾眉山のあり蜀の地ハ都を去る事
遠き僻境うり推量する小田舎の標準うまび学者の書一ふ
あるべくす俗子の筆うづきまど我今之俗竹を竹とイ小誤
の類う猶博識の説を俟つ

○苗場山

苗場山ハ越後第一の高山うり魚沼郡小登り二里と絕頂小天然の苗
田あり依て昔より山の名小呼うり峻岳の巔小苗田あり事甚奇あり
余其奇跡を尋んとるゝ事年あり小文化八年七月偶かひたもつて

友人四人・晴齊・嶽齊・従僕等不食類其外用意の物をりとせ同月五日
未明小なむりそ其日ハ三ツ僕とひ驛小宿り次日晚を侵して此山の神職不
りうかへ一紺をかへ案内者を傭ふ案内ハ白衣小幣を捧げて先ふ
ちむ清津川を涉りて攀ふいよどり崎道を踏嶮路ふ登る小樹檜
森列へ日を速り山篠生ひ茂りて徑を塞ぐ枯る老樹折々路
横りうるを踰えハ卧竜を踏ふ一條の溪河を涉り猶登る事半里
許右小折々とも左りふ曲りそつぎ奇木怪石千態万状筆を以
てりひづて已ふ半途ふいよどり鳥の声をもきらず殆東西を弁へ
道うきどり案内者ハよく知りてまきも山篠をかへとけ幣を
さげてみちを示す藤蔓笠ふまとい叢竹身を隠す石高く
徑狭く一步も平阻のまちをあまざやかく午をば頃山の半ふりす
僅の平地を得て用意して卧座を木蔭小まて食をう暫く

憩てまことにわざりて神樂岡といふ所ありまことにより他木さうふ
きく俗ふ唐松といふの風ふなけとのぞましき梢ハ雪霜ふゆ枯されん
低き森をうへてこかこかありまことのわざり少く御花園といふ
所山桜盛すひき百合桔梗石竹の花あらそのまゐ人の植やうひく小似す
名をあらうする異草あまことあり案内者小問ハ藥草ありといひまこと
のわざりゆきく機鬱うる道ふあらう岩ふとうつき竹の根を力草と
一歩一小声を発ノツ氣を張り汗をろぐ千辛万苦のわざりして
馬の背とひの所ふいづる左右ハ千丈の谷ありあも所僅ふ三尺一脚をあや
まつ時ハ身を粉碎ふうむすべをひき忙怕あゆみて竟不絶頂ふいづるづぬ
○備同行十二人すげ草ふ坐して憩ふ時已ふ下晡うりすゞめ案内者の
ひへへ登り二里の険道うまと一日小往來もることあるぞ絶頂小屋在
こふのわざり人必ちの小屋ふ一宿もる事ありといひ今その小屋をこまび

木の枝山き枯草あと取りあつらうぢうあく匍匐入るぢうり小作りた
は野非人のをうづきみありことを今夜のやどりふきあらるもをうりと
えく笑ふ僕どりハ樹枝をひうひ石をあつて假ふ灶をうへりてせたる
食物を調せんとあらひハ水をたべて茶をすまし上戸ハ酒の烟をのぞくも
をじまそ眺望が越後さうく浅間の湖を見る信濃の連山を眼下ふ波濤を千隈
川ハ白き糸をひき佐渡ハ青き盆石をく能登の洲崎ハ蛾眉をあへ越前
の遠山ハ青黛をのぞせりと小眼を拭て扶桑第一の富士を視ゆそりそろそろ
きゆ雪の一握りを置ヶ如一入く手を拍奇うりと呼ひ妙うりと称讚を半
勝万景應接もる小道あへぞ雲脚下小起ふとまばたき晴日光眼を
射す身ハ天外ふ在が如一是絶頂ハ周一里と云奉くたる平荒高抵の所
を不見山の名ふとまが苗場といふ所とくふふありそらまゐ人のほり
よる田の如き中人植うるやうふ苗ふ似うる草生ひうる苗代を半とく

のうへとすらある所をあつてこそ奇ありとむふ此田の中ふ蛙巣冬虫も
ありて常の田から事匪又はる且すやも田水枯ぎを二里の巔小比奇跡を觀ること
甚不思議の灵山あり案内者りりく御花園よりすみり別小徑ありて竜
岩窟とり所あり窟の内ふ一條の清水あがとものやとう小古錢多く鰐口二ツ
掛りありて神を祀るより如斯とりひづすら今ハ草木ふ塞き
てまともあらずとて絕頂ふも石に刺して苗場大権現となり案内者ハ此石
人作すを天竺の物とソリ俗傳あらずかと見ゆぢうち日をよまニ小屋亦内アリハ
挑燈をまわすありて外ふ火を焼そあてび食をうりてのよひて酒を
酌六日の月皎くとてじく空もちう紀やうふ桂の枝も見るまことちーつ
人く詩を賦一奇をよみ俳句の吟興もありて時をうつたまうり寒
氣次第烈しく用意の綿入ふもあひだうて終夜焼火ふあくろて夢も
むすびをあらめうたりまらうがふをよこすなまばいぎや御來迎を拜

たまたと案内者ひふまを拜所ふひて日の昇を拜一まくとくのて山
をくづます別ふ紀行ありて○百樹曰余越遊する時牧之老人小此山の地勢
を委一きて真景の圖をも視ゆるか巔の平坦うる苗場の奇異竜岩
窟の古跡など水ゆも自在の山みまがもそくハ上古人ありて此山をひいた
絶頂を平坦ふう一馬の背の天險をたのみて小住居一耕作をも
くらぐひびそのち其灵魂をふとまきて苗場の奇異をもろもよと思て
國史を搜究せし其徵ある端をも得べや博達の説を聞ん

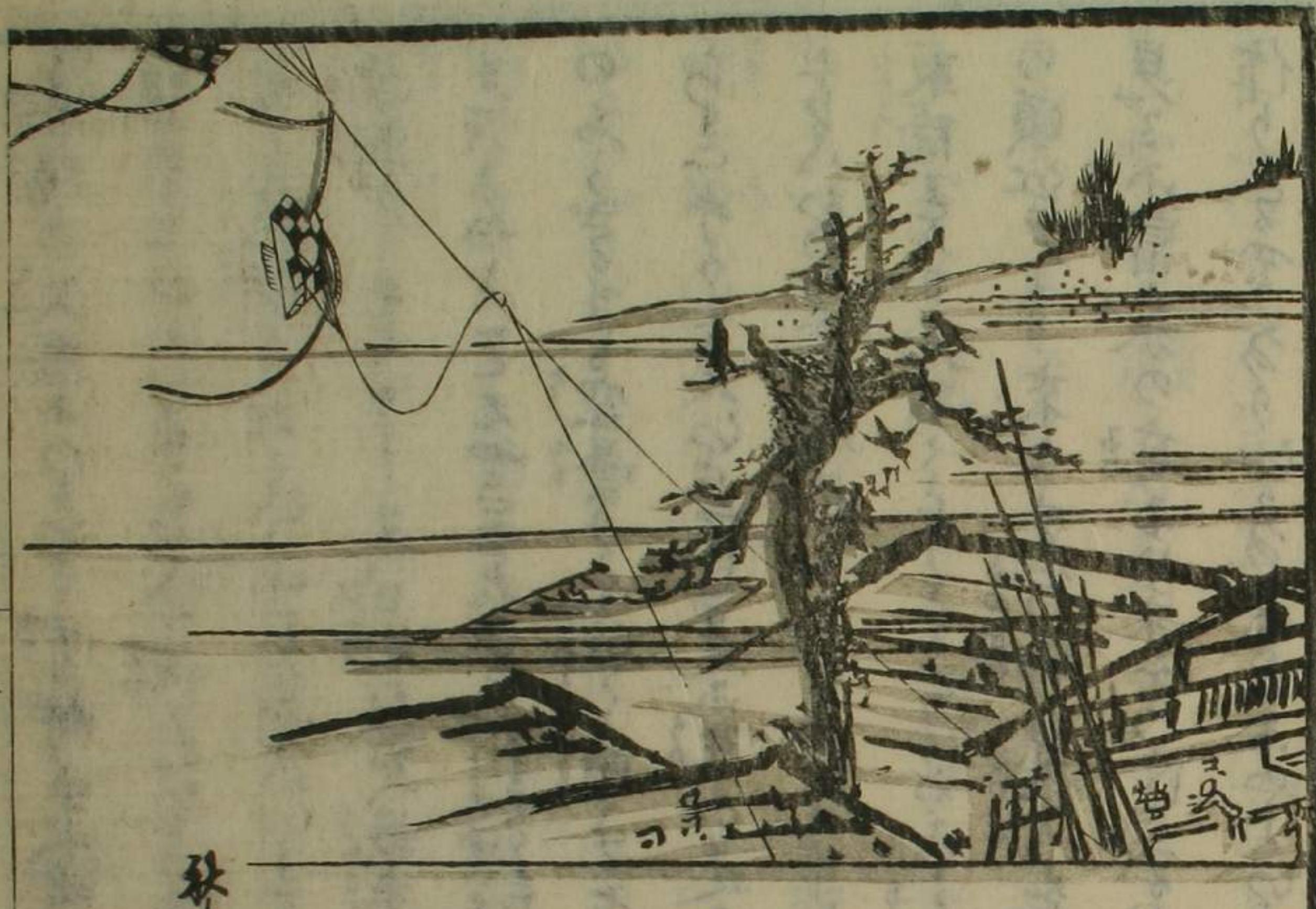
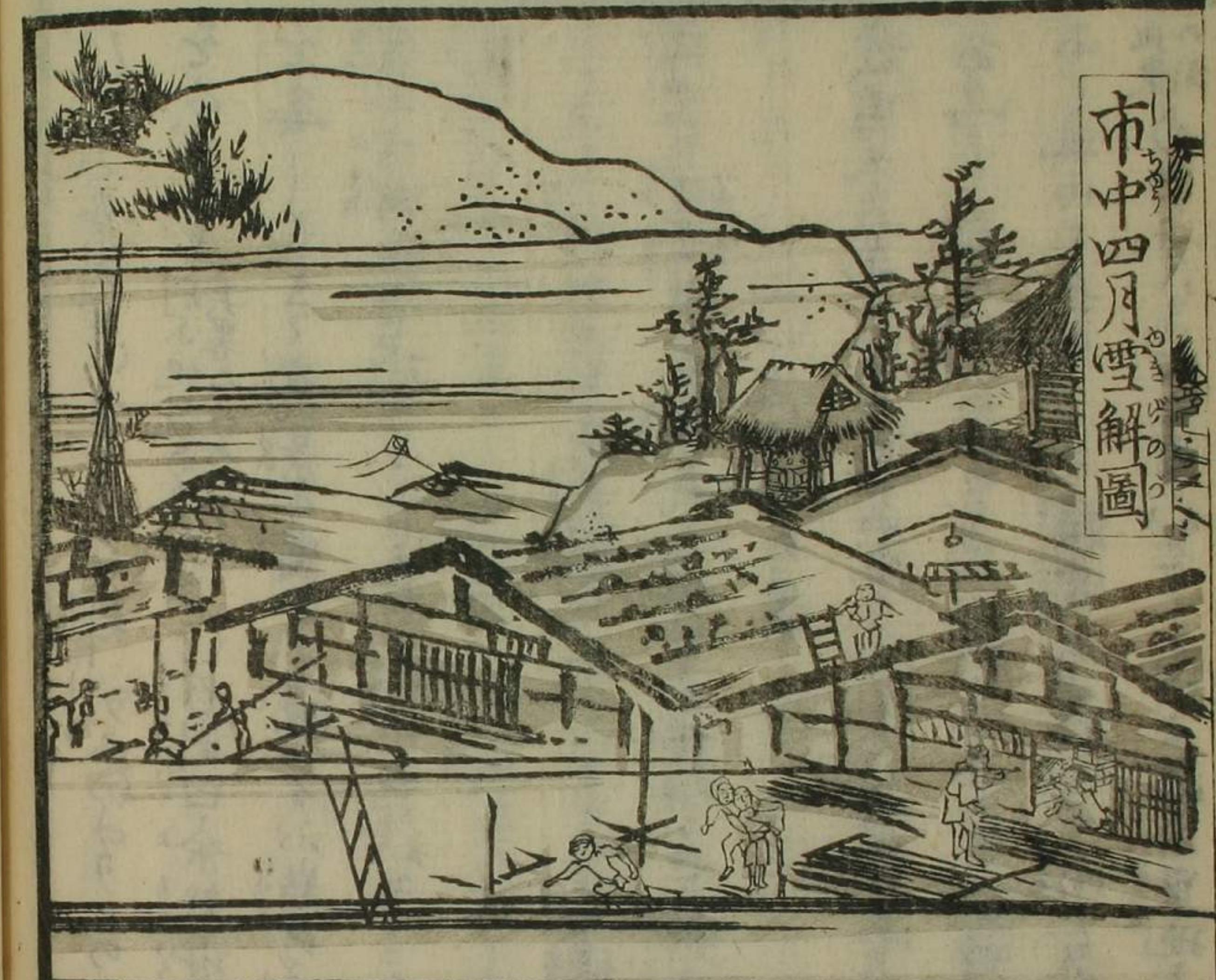
○三四月の雪

我国久々まくあり春ふうりても二月頃まで八雨降る事う一雪のあらゑ
あづ一春の半分ひまど小雨ある日あり此時ふいづれば晴天ハりとより雨
ふも風ゆも去年より積雪をとく小消えりまことに家居あぐハ乾引
北東あつて方ひある事をそー山の雪ハ里地よりもまく變おとけとど

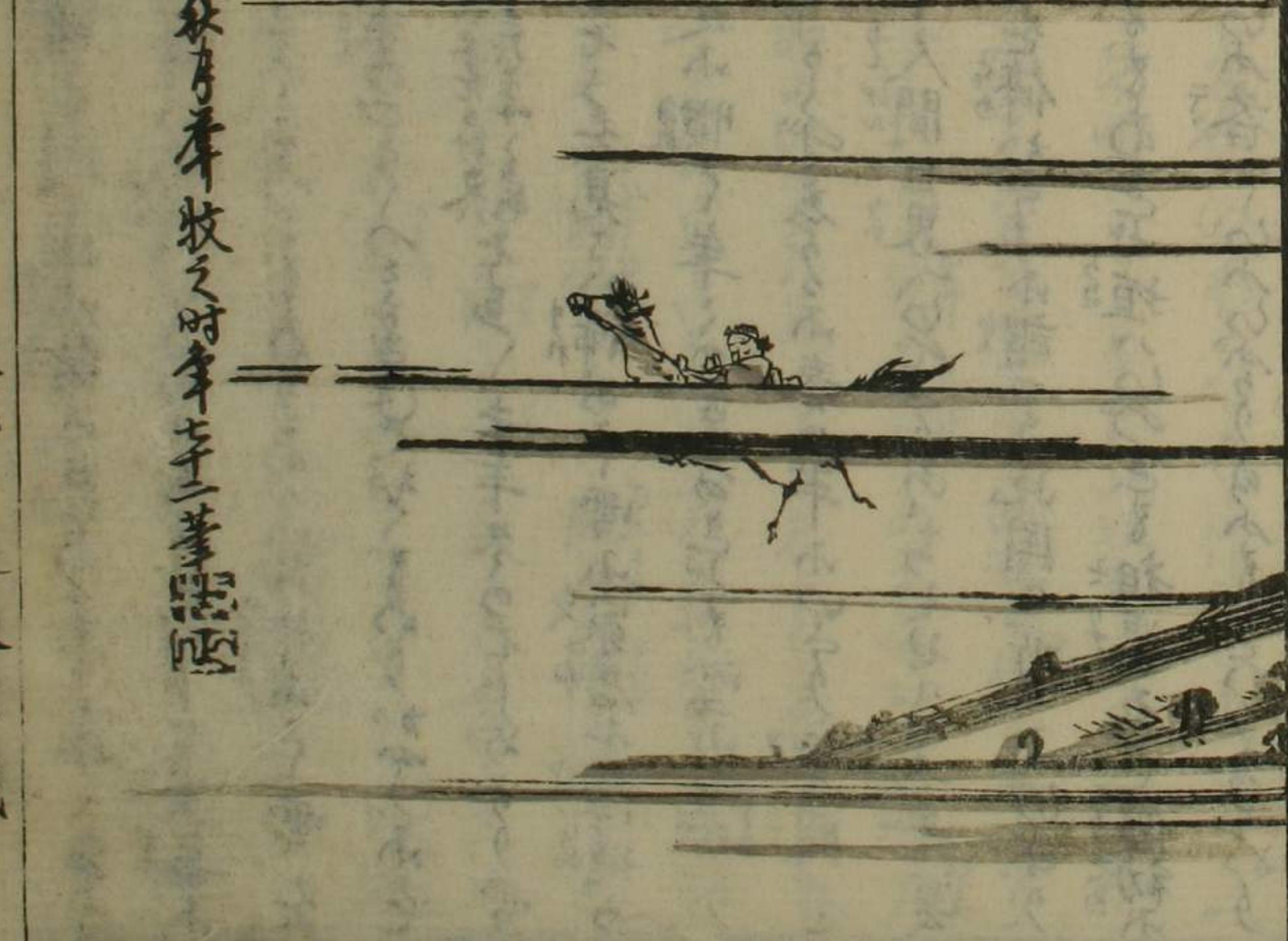
雪詩二編卷之二

大清堂

市中四月雪解圖



秋序草牧之時辛未二筆



春陽の天然ふつとく雪解不水増く川くふ水難の患ある事年々あり
春のをゑひまど人の住ゐての雪が自然ふきゆをもとめて家毎ふ
雪を取捨ふあひハ雪を薙ふひまくもつもありあひハ鋸ふく雪を
挽割くもとモー又ハ日向の所(松木のごくつみき)をももありかうふを
もぐまゆるとえきやるう灰をうだすもとく去年冬のそぞりより雪
のあうぎ日も空曇りく快く晴う。そくを見ふ稀みて雪小家居を降理め
らき手ゆとまへひと星ふ生と見ふ懶く年この支うもども雪ふありり
をるハかづく勝然とく心たゞくすあるふ春の半ふいづ雪園を
取除まし日光明とくもとぞやく人間世界へりどるあちビセく一年夏
の頃江戸より來りくる行脚の佛人を停まつ。小謂す此國の所くひづり
見るふ富家の庭あハ手をつじるもあまと垣ハいづる粗畧みて假初不
作りするやううひううやゑふやとりふ答うひびうみもとふりううかう

そめ小作りかくハ雪のゆきありしんとくまくひうわどつとく作るとも一文のう
そと雪ふかく崩すゆゑかくくつてもきて雪のそぞらむは此垣をとくのうう
と語り一事ありき三月の末ふいづよべ我まきふと垣を作事うり
まそ又雪中ハ馬足もたも耕作もせざまば馬ハ空く廐ふあそびをく事凡
百日あまく(我国小牛のミ)雪まゆるの時ふいづよべ馬もトくあくもまくう
嘶き路ふひんともる心あり入も又スくちあく足をのをせんとく廐を
ひきひきとよこひくをねあぐりあどもを胴縄ぞりの駒馬小騎り雪渭の
所かもくらす比馬冬こもりの飼やうふより瘦ると肥るありくやせうハ馬
主の貧きもあくまのうり馬のまふあくぞ童どり雪のそぞらより外遊
もう事うううううううううううううううううううううううううううう
草履せつてふうう風ふぶかひくうふうううううううううううううう
櫻も此こうをさううふく雪ふ世外の花を視ううう

○鶴恩小報也

天保七年丙申の春我が郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号を
二松といふすの商ひの爲西國ふりて或城下小逗の間旅宿の主がみ
し此近在の農人あまむ田地のうち小病鶴ありて死ふりとすを
見つけ候る人參あく鶴の病を養へ小日あくを病癒て飛去りけり
さて翌年の十月鶴二羽かの農人が家の庭ちうく舞へり稻二莖を落
一聲ごき鳴て飛さりけり主人拾ひとりく見るふた丈六尺小あすり穗
も豈ふつまく長く穗の一枝小稻四五百粒のり主人がてきて去年の
病鶴恩小報んとあ異國より咥えきてアラム何ともわざひとらび
らき稻うりとく領主が奉りけふもあくとくめあくまのりそめ
ま主がなまくやきともわせふよりく苗のとうかく心をつく
植つけり小鶴があそぶふうく生ひりでけよバ國の守つも奉り

一とくより東五郎猶ちの村ちの人に尋まけば鶴を助ける人ち
東五郎が縮を賣つて家あまむ家ふりて猶委く聞てこそ國の土
産ふせん穀を二粒賜ふくとしけよアド越後八米のよき國とまく
こさく小生ひくんとて五六六十粒与ふを國へ持てりて事の来由をやて
邦君小奉りを御城内小植へ玉ひ東五郎、御褒賞あど在」と
小千谷の人ちの頃物ぞまくかの小余がことじ賤農もかくめで
御代小生ひまくこそ安居してかく筆も採あまく千年的昌平を
いのりて鶴の話小筆をとづりつ猶雪の奇談他事の珍説あく漏れ
するも最多けまぐ生産の暇あくび編を嗣げ

通巻画圖

京水 岩瀬百鶴筆



京山人百樹翁著述目録

○和漢印章考

五卷

本朝古印の摸本を圖り制度用格を弁し考證漢印小字を以て和漢と目す。朱象賢が印典の作格小字也。

○食物沿革考

五卷

○和漢押字考

三卷

昔の食物と今との食物の沿革を弁し食器の古圖あまと諸書を引て考をもと

○骨董集三編

二四編卷

醒齋京傳先生遺稿京山翁增修

○女粧考

前後六卷

○芭蕉年譜

三卷

芭翁一代の始終をもと

○高尾考

同

万治の高尾白刃不死と云ふ妄説を論弁

○茶の湯初心抄

同

高尾十一代の傳遺墨遺器をうつものも

○茶の湯初心抄

同

茶のゆを学び人以書をえればその大槻をもと

東京神田區神田雉子町
三十壹番地

書肆 寛裕舎

各書林

卷之三

卷之三

卷之三

